

# Macbeth における irony について

井 上 和 俊

Shakespeare は、初期の作品以来、人間を欺く‘偽りの外見’とその背後に潜む‘現実’の問題を絶えず問い続けてきた。Macbeth に於いても、この問題が主人公 Macbeth の自己欺瞞と関連して、Macbeth の辿る栄誉と破局を通して、或は彼を取り巻く登場人物の直接的、間接的な台詞を通して、反語や逆説を形成しつつ提示される。

ここでは、Macbeth の自己欺瞞が、この劇の用語法の上で、また構成そのものの上で、この劇のもつ反語的、逆説的な意味と如何に関連しているかを辿り、且つこの作品に於ける‘外見’の背後に潜む‘現実’とは何であるかを探してみたい。

## 1

Macbeth は劇の最初から悪人ではない。‘disloyal traitor’ (I, ii, 53) の逆を治めて凱旋する ‘brave Macbeth’ (I, ii, 16), ‘valiant cousin’ (I, ii, 24), ‘worthy gentleman’ (I, ii, 24) であり、王の信頼厚き peerless kinsman (I, iv, 58) である。a bleeding captain によってもたらされる Macbeth の奮戦振り (I, ii, 16-24) や王の数々の称讃 (I, iii, 89-93) は、武将としての勇敢な Macbeth を一際顕著にする。勝利の凱旋に得意な Macbeth を、やがて Scotland の霧と魔女達を取り囲む。‘So foul and fair a day I have not seen.’ (I, iii, 38) と云う Macbeth の最初の台詞は、魔女達の述べる言葉 ‘Fair is foul, and foul is fair.’ の呼応であり、この種の pattern が、この劇全体に互って、この劇のもつ基本的な theme と密接に関連する。

Macbeth が荒野で魔女に出会うのは ‘fair’ と ‘foul’ の入り混った天気の日である。又凱旋する彼の気持は ‘fair’ であり、魔女達の醸し出す荒野の雰囲気は ‘foul’ だとも云える。Macbeth に於いては、この ‘fair’ と ‘foul’ の「同時的混合」——つまり ‘fair’ と ‘foul’ が Macbeth の心の中で同時に存在すること——、及び ‘fair’ と ‘foul’ の「転倒」が、基本的な theme を形成していると云える。まずはじめに、このような「同時的混合」及び「転倒」の pattern をたどりつつ、自己欺瞞をみてゆこう。

Macbeth は現実を見詰めることを怠り、未来を強引に自分のものにしようとして悪の道に踏み込み、現実も未来も同時に失った男であった。彼をそのような早急な行動へと駆り立てたものは、外ならぬ彼の激しい野心 ‘vaulting ambition’(I, vii, 27)であった。荒野で魔女に出会った Macbeth は、彼女達の ‘prophetic greeting’ (I, iii, 78) を聞いて恍惚となる (‘he seems rapt withal.’)(I, iii, 57)。そしてしきりに彼の野心を掻きたてる魔女共の魅惑的な言葉に引き入れられてゆく。

(Aside) This supernatural soliciting

Cannot be ill; cannot be good: —

If ill, why hath it given me earnest of success,

Commencing in a truth?

(I, iii, 130-133)

Macbeth は野心のために魔女の予言を自分の未来に都合よく解釈する。‘ill’ と ‘good’ とが彼の心中で葛藤し、彼の心は妄想に満たされて、今、現にそこにはない未来のこと以外には何も見えなくなる。(‘nothing is, but what is not.’)(I, iii, 142)。Macbeth は現実の榮譽に加えて、王になるという未来をも同時に掴みたい。彼には、例えば Hamlet のような ‘To be, or not to be.’ (Hamlet. III, i, 56) の疑問は存在しない。‘fair’ か ‘foul’ かの二者選一を迫られるとき、Macbeth は ‘deep and black desires’ (I, iv, 51) に心が曇り、‘fair’ と ‘foul’ の価値が転倒した魔女達の世

界に引き入れられてしまう。彼はたとえ ‘foul’ な手段によっても未来をなんとか自分のものにしたい。ここにまず彼の自己欺瞞が始まる。そして Duncan 王を殺害すると云う最も手っ取り早い手段で王位を篡奪してしまう。しかしこの早急な実行の影には、罪に慄く心がつきまとう。Duncan 王の二人の侍従をも同時に殺してしまった Macbeth の釈明をみよう。

Who can be wise, amaz'd, temperate *and* furious,

Loyal *and* neutral, in a moment? No man: (II, iii, 108-109)

この自己弁明のなかには、彼の本心が覗いている。例えば、A と云う状態にあるものが同時に相対立する B の状態であろうとすること、つまり Macbeth に於いては、自分の心の正体を包み隠して同時に外見を繕おうとすること(‘make our faces vizards (=masks) to our hearts, /Disguising what they are.’) (III, ii, 34-35) が Macbeth の自己欺瞞 ‘self-abuse’ (III, iv, 106) であってみれば、この劇に於てAとBが同時に起ることを示す pattern が顕著にあらわれることは肯げよう。劇の冒頭の魔女の言葉、‘When the battle’s lost and won’ (I, i, 4) は、‘What he has lost, noble Macbeth has won.’ (I, ii, 69) に呼応し、Macbeth がこの劇の進展に伴って ‘lost’ し ‘won’ してゆく実体 (reality) を示唆している。魔女達は Banquo に次のように云う。

1 *Witch*. Lesser than Macbeth, *and* greater.

2 *Witch*. Not so happy, yet much happier (I, iii, 65-66)

冷静な Banquo にくらべて、Macbeth がこの種の一見曖昧な言葉に欺かれていくのは、彼が野心に駆られて現実と未来を混同するからである。三人の魔女の言葉：

1 *Witch*. All hail, Macbeth! hail to thee, Thane of Glamis!

2 *Witch*. All hail, Macbeth! hail to thee, Thane of Cawdor!

3 *Witch*. All hail, Macbeth! that shalt be King hereafter.

(I, iii, 48-50)

を聞いたとき、彼の意識のなかで過去と現実と未来が同時に激しく渦巻く。そして Macbeth は魔女の予言通り王になる。と云うよりは王位を強引に篡奪するのである。彼には Lady Macbeth という共犯者があった。彼女は怯み勝ちな夫の野心を絶えず叱責し、彼の目をしきりに未来へと向けさせる。

Great Glamis! worthy Cawdor!

Greater than both, by the all-hail *hereafter*!

Thy letters have transported me *beyond*

*This ignorant present*, and I feet now

*The future in the instant.*

(I, v, 54-58)

しかし未来を手に入れるためには、Macbeth はまず暗闇に身を覆い隠さねばならぬ ('Stars, *hide your fires*') (I, iv, 50). 彼の 'black and deep desires' (I, iv, 51) は、魔女達の醜悪な blackness の世界: 'Root of hemlock, digg'd *i' th' dark*; / ... and slips of yew, / Sliver'd *in the moon's eclipse*;' (IV, i, 25-28) に連なる類の薄汚い性質のものであることは否めない。Lady Macbeth も同様に自分を偽り、暗闇に身を隠し ('Come, *thick Night*;) (I, v, 50), 天が闇の毛布から顔を覗かせないようにと望みつつ ('Nor Heaven *peep through the blanket of the dark*;) (I, v, 53), そ知らぬ風を装わねばならぬ ('Only *look up clear*; / To alter favour ever is to fear.')(I, v, 71). しかし、天の力はいずれ闇の毛布を貫いて訪れることになる (IV, iii, 237-239). Duncan 王暗殺前後は、Lady Macbeth の積極性がしきりに Macbeth を悪の道へと駆り立てる。彼女は、世間を偽るには世間と同じ顔をして ('To *beguile the time*, / *Look like the time*;) (I, v, 62-63), 上部は無心の花と見せかければ、あとはどうにでもなるといふ。一度は罪の恐ろしさに慄いた Macbeth も、彼女に押されて遂に Duncan 王殺害を決意する。

I am settled, and bend up

Each corporal agent to this terrible feat.

Away, and mock the time with fairest show :

False face must hide what the false heart doth know.

(I, vii, 80-83)

しかし、世間の目を騙そうとした Macbeth は、生きて世間の見せ物になる('live to be *the show and gaze o' th' time* :')(V, viii, 24)か、杭に縛りつけられた熊のように (V, vii, 1-2) のた打ち廻って死ぬかを選ばねばならぬ破目に陥ることになる。

このようにして、彼等が暗闇に身を隠し、世間の目を偽って手に入れた王座は、到底眩しい白昼の光を受けるに忍びない。時の経過に伴い、彼等の実体が自ずから頭にされてゆく。Macbeth 夫妻は、昼を殺し、夜を永遠に手元に止めておくこと——つまり時間を支配すること——は出来ない。彼等は自分達の王座を人々の信頼と栄光に包まれていた Duncan 王の如きものと想像したが、事實は 'fruitless crown' (III, i, 60), 'barren sceptre' (III, i, 62) であった。彼等は未来から現実に目を転じざるを得ない。

*Macb.* To be thus is nothing, but to be safely thus :

(III, i, 47)

*Lady M.* Nought's had, all's spent,

Where our desire is got without content : (III, ii, 4-5)

彼等が王座について得たものは、'doubtful joy' (III, ii 7), 'restless ecstasy' (III, ii, 22) に過ぎなかった。

このような不安は、全て彼等の欺瞞に帰因する。Macbeth は 'I am not what I am.' (*Othello.*, I, i, 65) であることに徹底する Iago 程にそ知らぬ顔をする事は出来ない。'torture of the mind' (III, ii, 21) は絶えず彼につきまとい、遂には 'O! full of scorpions is my mind, dear wife!' (III, ii, 36) となる。絶望の深淵に落込んだ彼は、悪への強固な意志を固

る ('Things bad begun make strong themselves by ill.') (III, ii, 55). それは最早外見のみを気にする小悪魔的な悪ではない。自然の種子が根底から覆り、破壊がこの世をおおい尽すようにと呪咀する ('Nature's germens tumble all together, / Even till destruction sicken.') (IV, i, 59-60) 悪への激しい力を込めた積極的な意志である。

Macbeth の悪の猛威によって、世界は転倒する。Scotland は破壊と荒廃に満たされ、毎日新しい孤児が叫び、新しい悲しみが天の顔を打つ(IV, iii, 5-6). Macduff の子供も 'Father'd he is, and yet he's fatherless.' (IV, ii 27), となる。魔女の言葉、'fair' と 'foul' の転倒は、凄まじい破壊の力となって天地に跳ね返る。それは人間の世界のみでなく、動物界や植物界をも含めた宇宙全般に迄拡大する大規模なものである。Malcolm に今こそ立ち上がるべきだと説得すべく、England に走った Macduff に向って、彼を Macbeth の廻し者と疑う用心深い Malcolm は次のようにいう。

Nay, had I power, I should

*Pour the sweet milk of concord into Hell,*

*Uproar the universal peace, confound*

All unity on earth.

(IV, iii, 97-100)

Macbeth に対する irony を含むこの言葉は、やがて逆となり、'sweet milk of concord' の力、即ち破壊に対抗する力が生まれる。Malcolm と Macduff の和解はそのような力のきっかけとなる。

*Macd. Such welcome and unwelcome things at once,*

'Tis hard to reconcile.

(IV, iii, 138-139)

Macbeth によって語られれば二義的な意味を持つであろうこの pattern は、ここでは一途な Macduff の気持を端的にあらわしている。

## 2

それでは *Macbeth* に於て ‘fair is foul, and foul is fair.’ でないもの、云い換えれば、‘equivocal’, ‘double’ でないもの、或は終始一貫価値の転倒のないものとはどのようなものであろうか。先の ‘milk’ は *Macbeth* に於て屢々あらわれ、*Macbeth* 夫妻が無理に退けた *humanity* の象徴として、彼等の *anti-humanity* と対立する。Lady *Macbeth* は、事を手短かに運ぶには情のミルクが多過ぎる夫を (‘too full o’ th’ milk of human kindness’) (I, v, 17) 励ますために、まず自ら闇の手先に向かって甘い乳を苦い胆汁に取りかえて呉れるようにと (take my milk for gall) (I, v, 48) 頼まねばならない。また ‘milk’ と関連して ‘babe’ の image は、一見 ‘weak’ で ‘helpless’ であるが、やがて成長して悪と対決する潜在的な力を有するもの、且つ ‘innocent’ なもの、従って ‘cherubin’ や ‘angel’ と共に天の力にも連なるものとして、*Macbeth* 夫妻の black desires と対照的に展開する。Macbeth が恐れているものは、堂々と進軍する武装した軍隊や、獠猛な動物共 (‘the rugged Russian bear, / The arm’d rhinoceros, or th’ Hyrcan tiger;’) (III, iv, 99-100) ではなく、天の裁き ‘judgment’ (I, vii, 8) や ‘Pity’ (I, vii, 21) に連なる ‘a naked new-born babe’ (I, vii, 21) や ‘heaven’s Cherubins’ (I, vii, 22) である。*Macbeth* には、王位についてからも、Banquo の子孫が王になるという魔女の予言が、絶えず不安となってつきまとう。そして、自分の未来を確立するために、他人の未来、即ち Banquo の子供の Fleance を殺そうとする。しかし Duncan 王の二人の子供、Malcolm 及び Donalbain に逃げられた如く、Fleance にも逃げられてしまう。傷つけた腹が元通りになれば、その毒牙がまた気になる (III, ii, 13-15)。腹黒い *Macbeth* の心裡には、今は力なくともやがて成長して彼を脅かす存在が、ある時は、innocent な ‘naked new-born babe’ にみえ、ある時は、当分歯はないが、いずれは毒牙をも

つ子蛇 ‘worm’ (III, iv, 28) にみえる。それらは、後に出てくる幻影のなかの血まみれの子供や、王冠を戴いた子供、Banquo の亡霊が付き添うた王の行列などと共に、彼の魂を震い上らせ、彼の未来に対して不安と疑惑を増大させる。血まみれの子供の幻影は、Macbeth に向って次のようにいう。

Be bloody, bold, and resolute: laugh to scorn

The power of man, for none of woman born

Shall harm Macbeth.

(IV, i, 79-81)

女の生み落した者からは決して倒されない筈の Macbeth は、母親の腹を切り裂かれて生れ出た Macduff (V, viii, 15-16) によって倒されることになる。血の中から生れ出た Macduff は、自分の子供の犠牲を通して流された血の中から立ち上り、血を流す Scotland の惨状を救い、Macbeth に復讐する。また、王冠を戴いた子供は手に一本の木を持ち、Birnam の森が Dunsinane の丘に向って動いて来ぬ限り、Macbeth は決して亡ぼされぬと云う (IV, i, 93-94)。しかし地中ががっしりと根を張った(‘earth-bound root’) (IV, i, 96) 動く筈のない Birnam の森が動いてくる。石が動き、立木が告げ口をしたこともある(‘Stones have been known to move, and trees to speak’) (III, iv, 122) と呟いた Macbeth であった。更に、Banquo の亡霊が付き添い、いつ果てるとも知れず続く無数の王の行列を、髪の毛をべっとり血で固めた Banquo は、これが自分の子孫だと云わぬばかりに笑みを浮べて指し示す。未来を保証されたつもりの Macbeth は、どんづまりで全てを裏切られる。

Macbeth は、魔女や幻影の言葉から、先に未来を予見するのではなく、来るべきものが来たときにはじめて我に返り、自分の宿命を認識する。このように、後になって一つずつ事の次第に気付いてゆくという irony の pattern が、Macbeth に於ける irony の特徴をなしている。つまり、先に言われたある台詞の意味が、後に何処かで必然的な運命の如き力をもって、Macbeth にはね返ってくるのだ。



劇の中程に於て、Macbeth の圧制を嘆く Lenox は次のように述べた。

Some holy *Angel*

Fly to the court of England, and unfold

His message ere he come, that a swift blessing

May soon return to this our suffering country

Under a hand accurs'd! (III, vi, 45-49)

この ‘angel’ は、Macbeth の殺人の罪を高らかに訴える ‘trumpet-tongu’d’ (I, vii, 19) angel に連なる。Lenox の願いが叶い、Malcolm や Macduff は England から戻ってきた。Malcolm が ‘*Angels are bright still, though the brightest fell:*’ (IV, iii, 22) と述べた如く、天の力はやがて彼等の頭上に輝くことになる。残虐な行為を重ねた Macbeth は、移りゆく大勢に逆らえず、急速に奈落の底へと落ちてゆく。Malcolm の次の台詞：

Though all things foul would wear the brows of grace,

Yet Grace must still look so. (IV, iii, 23-24)

には、‘equivocal’, ‘double’ なものと対抗する ‘fair is fair’ であるような力が、劇の最初から終始一貫して流れていることが示される。これらは、破壊に対する創造の力、*anti-humanity* に対する *humanity* の力であるといえよう。

Macduff の述べる言葉：

Macbeth

Is ripe for shaking, and *the Powers above*

Put on their instruments. (IV, iii, 237-239)

は最後に Macbeth の置かれた状態を如実に示している。

このような結果は、Macbeth が、‘milk’ や ‘babe’ によってあらわされる *humanity* の世界、或は、眠りや饗宴によってあらわされる憩いと平安の世界を脇へ押しやって、‘self-abuse’ (= self-deception)(III, iv, 141) の

道を歩き続けてきたからであった。Lady Macbeth もまた、Macbeth 同様、‘sleep’ から追放され、夢遊病 (sleepwalking) にさ迷う身とならざるを得ない。

*Doct.* A great perturbation in nature, to receive *at once*

the benefit of sleep, *and* do the effects of watching! (V, i, 9-10)

最初は、‘The sleeping and the dead, / Are but as pictures.’ (II, ii, 52-53) と平気で Duncan 王の侍従に血糊を塗りつけにいった彼女であった。また、Duncan 王の殺害を告げる警鐘が響いたとき、‘人々を静かな眠りから呼びさまし、一堂に集めて一体何事が……?’ (What’s the business / That such a hideous trumpet calls to parley / *The sleepers* of the house?) (II, ii, 82-83) とぞ知らぬ振りをした彼女であった。眠りを軽視した彼女は、眠っているときも目を閉じることが出来ない (V, i, 23)、という悲惨な状態に陥る。‘What’s done is done.’ (III, ii, 12) は、‘What’s done cannot be undone.’ (V, i, 64) となる。彼女は最早心の重荷に耐えられない (‘The heart is sorely charged’) (V, i, 51)。彼女の口から聞いてはならぬことを耳にした Doctor の心は顛倒する。

My mind she has mated, *and* amaz’d my sight. (V, i, 75)

強かった Lady Macbeth はあえ無く狂死し、弱かった Macbeth は今や悪に向って絶望的な渾身の力を込める。しかし Macbeth にもふと人生を回顧する時がある。

And that which should accompany old age,  
As honour, love, obedience, troops of friends,  
I must not look to have; but *in their stead*,  
Curses, not loud, but deep, mouth-honour, breath,  
Which the poor heart would fain deny, and dare not.

(V, iii, 24-28)

口先の尊敬や追従、低くよんだ呪いを、Macbeth は人生の晩年に期待

してはいなかった。彼は自分が魔女の言葉に騙され続けてきたことを知らされる。

I pull in resolution; and begin  
To *doubt th' equivocation* of the fiend,  
That *lies like truth*: (V, v, 12-44)

And be these juggling fiends no more believ'd,  
That *palter* with us in a *double* sense;  
That keep the word of promise to our ear,  
And break it to our hope. (V, viii, 19-22)

‘fair’ と ‘foul’ が double した世界は、魔女達の世界を描いて外になかった。地上の祝福された世界では、‘fair’ は ‘fair’ であり、‘foul’ は ‘foul’ であった。

*Two truths* are told,  
As happy prologues to the swelling act  
Of the imperial theme. (I, iii, 127-129)

と云う壮大な王国の主題も、反転して  
Win us with *honest* trifles, to *betray's*  
In deepest consequence. (I, iii, 125-126)

に終るのである。

*Macbeth* には deception に関連したこのような激しい転倒の pattern がある。

## 3

以上みてきたような irony の pattern が *Macbeth* を構成しているが、次に、*Macbeth* の自己欺瞞が、他の登場人物との関連に於いて、*Macbeth* 以外の登場人物からどのようにみられているか、またそれが直接的、間接

的にどのような irony のかたちをとってあらわれるかを、更に詳しく検討してみよう。

Banquo は荒野で魔女の予言を聞いてうっとりとする Macbeth をみて次のように呟く。

New honours come upon him,

Like our *strange garments*, cleave not to their *mould*,

But with the aid of use.

(I, iii, 145-147)

突然おとずれた榮譽は Macbeth には借着に等しく、彼の ‘mould’ (= reality) にはそぐわない。衣の image は、‘king-becoming graces’ (IV, iii, 91) に欠ける Macbeth の ‘mould’ を包み隠すには適切な image である。‘newest gloss’ (= spacious appearance) (I, vii, 34) に身を包んで ‘new honours’ (I, iii, 145) に得意満面な Macbeth が更に王の衣を身につけるには、彼は益々自分に似合わぬ衣を重ねねばならない。そのために彼は残虐な行為を重ねねばならず、悪循環が彼を悪の深淵へと陥れる。絶望的な腕きのなかで、自分自身晩秋の枯葉の如く生命の枯渇すら感じる (V, iii, 21-22) Macbeth は、ダブダブの ‘a giant’s robe’ (V, ii, 21) をまとった ‘a dwarfish thief’ (V, ii, 22) になり下がる。彼の兵士は唯命令で動くに過ぎず (He cannot *buckle* his *distemper’d* cause / Within the *belt* of rule.) (V, ii, 15-16), 彼の怒号は空中に空しくこだまする。

*Macb.* Give me my armour.

*Sey.*

‘Tis not needed yet.

*Macb.* I’ll *put it on*.

Send out *moe* horses, *skirr* the country round;

Hang those that talk of fear. Give me mine armour.—

(V, iii, 33-36)

*Pull’t off*, I say.—

(V, iii, 54)

かつて堂々と身につけた鎧を、今は落着いて満足に着ることも出来ない<sup>6)</sup>。彼は最早自分自身を制しかねている。衣裳の image は彼の置かれた精神状態を如実に描き出す。‘Let’s briefly *put on* manly readiness,’ (II, iii, 133) とさり気なく上部を繕った Macbeth であった。

Macbeth の悪行は Scotland を荒廃極まりなき病める国家 ‘sickly weal’ (V, ii, 27) に一変させた。Macduff の懸念 ‘Lest our *old robes* sit easier than our new!’ (II, iv, 38) は現実となった。一度 England に逃れた彼は、やがて軍勢を率いて Scotland に押し寄せる準備をする。同じく Malcolm のところに馳せつけた Rosse は次のようにいう。

Now is the time of help. Your eye in Scotland

Would *create* soldiers, make our women fight,

To *doff* their dire distresses.

(IV, iii, 186-188)

破壊に対する創造の行為が、Macbeth の身につけた (put on) 悪の所産: ‘dire distresses’ を脱ぎ捨てさせる (doff) 方向に向う。いつ明けるとも知れぬと思われた長い夜にやっと朝の光の兆がみえはじめる (‘The night is long that never finds the day’) (IV, iii, 240)。しかし ‘着る’ (put on) が ‘脱がせる’ (doff) 行為でなく、着る行為そのものとして肯定的積極的な意味を回復するには、Macbeth の悪の猛威が更に鎮まるのを待たねばならない。

Let our just censures

Attend the true event, and *put we on*

Industrious soldiership.

(V, iv, 14-16)

Macbeth の ‘Come what come may, / Time and the hour runs through the roughest day.’ (I, iii, 147-148) が現実となり、乱世が続いた。長い間混乱と破壊が地上を覆った。しかしどのような荒廃のなかからも、時の力はやがて創造の芽を再生させる。自然の種子は地表に掘り返されて根絶されることはなかった。Macbeth に於ける ‘Nature’ とはそのような潜在

的創造力をもった‘時’を含むものである。

Macbeth は、時を——未来を——掴もうとして掴み得なかった。「時に先手を打たれた」(‘Time, thou anticipat’st my dread exploits.’) (IV, i, 144) 彼は、魔女達の‘equivocation’ (V, v, 43) に二度返も欺かれた。そのような Macbeth の equivocation は、Malcolm の口から激しい irony となって迸り出る。

*Mal.* I grant him bloody,  
Luxurious, avaricious, false, deceitful,  
Sudden; malicious, smacking of every sin  
That has a name; but there’s no bottom, none,  
In my voluptuousness: (IV, iii, 57-61)

自分の底なしの desire にくらべれば、‘black Macbeth’ も ‘as pure as snow’ (IV, iii, 52) に過ぎないという Malcolm の言葉には、Macbeth に対する激しい怒りが込められる。王の適性 ‘the king-becoming graces, (IV, iii, 91) :

As Justice, Verity, Temp’rance, Stableness,  
Bounty, Perseverance, Mercy, Lowliness,  
Devotion, Patience, Courage, Fortitude, (IV, iii, 92-94)

に欠ける Macbeth は、同時に Macduff にとっても残虐な Tyrant (V, vii, 14) であり、畜生同然の ‘Hell-hound’ (V, viii, 3), ‘bloodier villain / Than terms can give thee out’ (V, viii 7-8) であった。

Macbeth に対する irony は、この劇に於いて Malcolm や Macduff のこのような激しい怒りの言葉に於いてのみでなく、酒に酔いしれた Porter の comical な言葉の中にも、dramatic irony として暗示される。

Faith, here’s an *equivocator*, that could *swear* in both the scales against either scale; who *committed treason* enough for God’s sake, yet could not *equivocate* to heaven: O! come in, *equivocator*. (Knock-

ing.)

(II, iii, 9-13)

Macbeth は天に二枚舌を使うことは出来なかった。酒のもたらす効用 : it makes him *and* it mars him ; it sets him on, *and* it takes him off ; it persuades him, *and* disheartens him ; ...' (II, iii, 32-34) には, 'fair is foul, *and* foul is fair.' に代表される対照語法がみられる。同時に二つのことをけしかける drink は 'an equivocator with lechery' (II, iii, 31-32) となる。Shakespeare は明らかに Macbeth の equivocation を念頭においてこの場を書いたと云えよう。

その他この劇に於いては、劇の冒頭から Macbeth の二心や反逆に対する irony が随所にみられる。劇の始めの Cawdor の領主の反逆そのものが、すぐ続いて起る Macbeth の反逆に対する伏線の役目を果す。Duncan 王が Cawdor の領主に対して

There's no art

To find the mind's construction in the face :

He was a gentleman on whom I built

An absolute trust——

(I, iv, 11-14)

と述べる時、これはその儘、殺された Duncan 王に口があれば、まさに Macbeth に向って眩かれる言葉であろう。

更に、Macbeth が Duncan 王を殺し自ら王となるにつけてのいきさつや、王位について後の残忍な行動は、三幕六場の Lenox とある貴族との対話のなかに、Macbeth を憚る微妙な irony を形成しつつ展開される。慈悲深い Duncan が Macbeth によって悼まれ、父王を殺した二人の息子の不孝を彼は深く嘆き悲しむ。悲憤のあまり忽ち侍従を斬ってしまった… (III, vi, 1-13) 等。王冠を得るため、'nobly', 'wisely,' (III, vi, 14) に事を運び、全てをうまく片付けた ('He has borne all things *well*.' (III, vi, 17) Macbeth は、偽りの外見に惑わされ続けた男であった。

## 4

以上見てきた irony は、見方を変えれば、外見 ‘appearance’ と現実 ‘reality’ の関係でとらえられる。つまり、irony は appearance と reality のずれや転倒から生じるといえよう。逆に、appearance と reality が表裏をなして irony を形成してゆくともいえる。Macbeth に於いては、それが ‘fair is foul, and foul is fair.’ のかたちであらわれ、この劇の基本的な theme に触れるものであった。

では、Macbeth の偽りの外見の背後に潜む reality とは、つまり Macbeth が欺いてきたものとは何であろうか。Macbeth が虚勢を張って歩いた人生が歩く影 (‘a walking shadow’) (V, v, 24) に過ぎなかったとすれば、その影の背後にある実体とは何であろうか。影は実体ではない。しかし実体のないところに影は存在しない。appearance が reality と表裏をなすものであれば、Macbeth が外見を繕って述べる言葉の背後にふと覗かせる彼の本心が、我々をこの作品の reality に近付ける。彼が Duncan 王を殺した時、人々の前で述べる言葉：

Had I but died an hour before this chance,  
I had liv'd a blessed time; for, *from this instant*,  
There's nothing serious in mortality;  
All is but toys: renown, and grace, is dead;  
The wine of life is drawn, and the mere lees  
Is left this vault to brag of. (II, iii, 91-96)

には単にその場の言い逃れでない実感がこもっている。そこでは未来を閉ざされた人間が同時に彼の人生に於ける意味を失わねばならぬことが吐露される。Macbeth にとって ‘意味あるもの’、彼が王座について期待したものは ‘blessed time’ (II, iii, 92) であり、‘renown, and grace’ (II, iii, 94), ‘The wine of life’ (II, iii, 95) であった。しかも彼が得たものは、そ



れとは全く逆のものに外ならない。彼が屢々吐露する本心は、きびしい実感となって、後程全て彼に跳ね返ってくる。彼が Malcolm と Donalbain に述べる言葉：

The spring, the head, the fountain of your blood

Is stopp'd; the very source of it is stopp'd. (II, iii, 98-99)

はその儘真実となって彼にうら枯れの人生をもたらす。彼は自ら、己の命の源泉を止めてしまった。Duncan 王を殺したことは、彼にとって 'great Nature's second course' (II, ii, 38), 'Chief nourisher in life's feast' (II, ii, 39) である眠りを奪われることにも等しい。眠りを奪われた人間は、肉体と精神の潰滅あるのみである。

しかし彼が眠りを

—the innocent Sleep;

Sleep that knits up the ravell'd sleeve of care,

The death of each day's life, sore labour's bath,

...

(II, ii, 35-37)

であると知るの、Duncan 王殺害の後に外ならない。殺された Duncan 王が墓の中で安らかな眠りにについていることは (After life's fitful fever he sleeps well;) (III, ii, 23), 彼にとって痛烈な irony となる。Duncan 王殺害は、このように彼にとって決定的であった。

To know my deed, 'twere best *not know myself*.

[Knock.]

Wake Duncan with thy knocking: I would thou couldst!

(II, ii, 72-73)

しかし彼は国王になってからも生きてゆく望みを棄ててしまった訳ではない。国王として生きることへの執着と、運命への不安と、人生への迷いが、逆に彼を人生に縛りつけているのである。唯彼は 'not know myself' (II, ii, 72) のままで生き続けることは出来ない。残虐な行為を繰り返し、

人殺しの思いにも慣れてしまい、「恐れ<sup>①</sup>の味を殆んど忘れてしまった」(‘I have almost forgot the taste of fears’) (V, v, 9) 状態のなかで、自分が人間として救われる望みがないことを知らされてゆく。それでもなお生きようとするのが彼の執着であり、迷いであり、再度魔女を訪れて再び欺かれるのだ。そして欺かれれば欺かれる程彼は益々自分の identity を知ることになる。この逆説的な運命の irony——欺かれまいとして自己を偽ろうとし、その結果益々自分の姿を知ってゆくこと——が *Macbeth* に於ける tragic irony を形成する。*Macbeth* は罪を犯して破滅してゆきながらも、「依然として精神の道を歩き、自分を見放した光を愛しつづける男<sup>②</sup>」であった。彼は、罪を犯した自分が、一面血に染んだ大海原を渡っているように感じる(II, ii, 57-62)。又、日々の疲れを癒す眠りから追放された<sup>③</sup>と慨嘆する(II, ii, 34-42)。このような良心の苛責と孤立感が、彼を‘光’から離れようとさせない。彼は闇の世界に唯一人孤立して立ちながら、益々目覚めてゆかざるを得ない。ここに *Macbeth* の悲劇性があると云えよう。

*Macbeth* は時間が人間存在に働きかける作用を無視した。そこから彼の未来は狂い出した。彼は ‘Come what come may, / Time and the hour runs through the roughest day.’ (I, iii, 148) が真実でないことを思い知らされるのである。彼は時を欺き得なかった。そして自分の辿った人生が、‘To-morrow, and to-morrow, and to-morrow’ (V, v, 19) と云う無意味な繰り返しに過ぎなかったことを知る。彼は無意味な人生を歩くことにより、自分の歩いてきた道とは全く逆の方向に(‘Returning were as tedious as go o’er’) (III, iv, 137) 意味ある人生があったことを知る。そしてこの意味ある人生 ‘renown, and grace’ (II, iii, 94), ‘The wine of life’ (II, lii, 95) からあまりにも遠くかけ離れてしまった *Macbeth* が、他の誰よりもその意味をよく知るのである。時に裏切られた男は、誰よりもよく時の存在の意味を知らされた男であった。人生は ‘Signifying nothing’ (V, v, 28) であるという *Macbeth* の台詞の背後には、自分には到底望む

べくもないもの、即ち‘意味ある時’への絶望的な渴望が汲み取れる。

この作品に於ける‘appearance’の背後にある‘reality’とは、‘意味ある時’であるといえよう。何故なら、L.C. Knights も述べる如く、「意味なくして時は存在しない。」(‘Without the meaning there is no time<sup>9</sup>’)からである。

×                    ×                    ×

Macbeth は、自己の本心を包み隠そうとして隠しきれなかった人間であった。彼は、‘I am not what I am.’ (*Othello*, I, 65) に徹した Iago の如く、自己欺瞞に徹底することが出来なかった。また、最初から悪党たらんとの決意 ‘I am determined to prove a villain.’ (*Richard III*, I, i, 30) (=‘I am I’) を抱いた Richard 三世とも違っていた。Macbeth に於いては、彼が心の正体を偽ろうとして(‘Disguising what they are.’)(III, ii, 35) 偽り通し得なかったことが、この劇に於ける独特の irony を形成する根幹となり、且つこの劇を悲劇たらしめる原動力となっている。

Shakespeare は、Macbeth に於いて、自己欺瞞を行う男を描くことによって、同時に決して自己欺瞞に徹し得ない一人の人間の姿を示している。そしてこのことが、この劇の何よりも大きな irony となっているといえよう。

#### 注

使用 text は *Macbeth* (The Arden Shakespeare), ed. Kenneth Muir (London: Methuen & Co., 1959) による。Macbeth 以外の作品からの引用は *The Complete Works of William Shakespeare*. ed. W. J. Craig (London: Oxford Univ. Press, 1954) による。尚原文引用中の italics は筆者による。

1) この問題を取り扱った著作に次のようなものがある。

Geoffrey Bush, *Shakespeare and The Natural Condition* (Harvard Univ. Press, 1956)., John Lawlor, *The Tragic Sense in Shakespeare* (London: Chatto & Windus, 1960)., Francis Fergusson, *The Idea of a Theatre* (Princeton Univ. Press, 1949)., Robert B. Heilman, *Magic in the Web*

- (Lexington: University of Kentucky Press, 1959), and *This Great Stage* (University of Washington Press, 1948), L. C. Knights, *Some Shakespearean Themes* (London: Chatto & Windus, 1959), etc.
- ② Cf. Ruth Frieman, *Understanding Shakespeare: Macbeth* (New York: Doubleday & Co., 1964), p. 13. "...foul because the air near the witches is dark and thundery, fair because the battle has gone well and possibly the weather has been pleasant."
- ③ 'Fair is foul, and foul is fair.' がこの劇の基調をなすことは殆んどどの批評家が指摘しているが, G. I. Duthie は更に 'fair is foul, and foul is fair.' に見られる如き 'pattern of inversion' が Shakespeare の 'conception of evil' と如何に関連しているかを *Macbeth* を中心に述べている. (G. I. Duthie, "Antithesis in *Macbeth*," *Shakespeare Survey*, No. 19, ed. Kenneth Muir [Cambridge Univ. Press, 1966], pp. 25-33).
- ④ Brooks は *Macbeth* に於て 'babe' の imagery の果す機能を Macbeth が上部をつくろって虚勢を張る 'manliness' と関連させて述べている. (Cleanth Brooks, "The Naked Babe and the Cloak of Manliness," *The Well Wrought Urn* [New York: Harcourt, Brace & Co., 1947]).
- ⑤ *Macbeth* に於ける衣の image は, 最初 Spurgeon によって取り上げられた. (Caroline Spurgeon, *Shakespeare's Imagery and What It Tells Us* [Cambridge: The University Press, 1952]).
- ⑥ Alan S. Downer は衣裳の image に関し 'The image is more than a mere verbal one. It is realized, made visual in the action of the play.' と述べてこの劇に於ける 'costume change' 即ち armour (Act II, Sc. iii 迄)→borrowed robes (Act V, Sc. iii 迄)→armour (以後最後迄)が舞台上で劇的に表現されれば Macbeth の 'disguise' を一層顕著に印象づけ得ると説明している. (Alan S. Downer, "The 'Language of Props' in *Macbeth*," *Shakespeare's Tragedies*, ed. Laurence Lerner [Penguin Books, 1964], pp. 213-216).
- ⑦ *A New Variorum Edition* は 'equivocator' に関して Dowden の次のような言葉を引用している.
- Dowden: I think we should ask whether Shakespeare did not make the Porter use this word, as well as 'hell-gate,' with unconscious reference to Macbeth, who even then had begun to find that he 'could not equivocate to heaven.' (Horace H. Furness Jr. (ed.), *A New Variorum Edition of Shakespeare: Macbeth* [New York: Dover Publications, Inc., 1963], p. 147.)

- 8) Edith Sitwell, *A Notebook on William Shakespeare* (London: Macmillan & Co., 1965), p. 28. “. . . the man who, in spite of his guilt, walks the road of the spirit, and who loves the light that has forsaken him. . . .”
- 9) L. C. Knights, *Some Shakespearean Themes* (London: Chatto & Windus, 1959), p. 141.